

「一テクル」「a/oe+oda」の日韓対照 —本動詞からの意味拡張を中心に—

姜 美善

キーワード

文法の類似性・多義性・非多義性・意味拡張・心理的方向

1. はじめに

統語的・構文的類似性が指摘されることの多い日本語と韓国語であるが、多義性を持つ本動詞から補助動詞へと起こる意味拡張については、両言語の間で顕著な差がみられる。日本語はクルのような多義性を持つ動詞の場合、本動詞にあった多義性がそのまま補助動詞へと意味拡張が行われる。しかし、一テクルの韓国語の対応形式である「a/oe+oda (아/어 오다)」(以下、「a/oe+oda」と示す)と、その本動詞である「oda(오다)」(以下、「oda」と示す)の間では、クルと一テクルの間にみられるような意味拡張は起こらない。一テクルの多義性とその本動詞からの意味拡張に起因するものであるとするならば、「a/oe+oda」の非多義性¹も本動詞である「oda」から影響されたものとみなすべきなのか。本稿では日韓両言語における一テクル文型の相違を調べ、韓国人日本語学習者にとって母語との違いから来る習得困難な意味を提示する。また、両言語におけるクルから一テクル(韓国語は、「oda」と「a/oe+oda」)への意味拡張の関係を調べ、一テクルの非用の原因の一つとして示す。

2. 韓国人日本語学習者の日本語文法に対する意識

韓国人日本語学習者にとって、日本語は平仮名や片仮名さえ覚えれば、後は文法も同じだし、基本的な漢字も分かるし、なんとかなる言語であるということをよく耳にする。もちろんこのような意識が言語習得にプラス的に作用すれば、外国語習得に対する緊張感や不安感を取り除くことができ、学習環境によい影響を与えることが出来ると思われる。ところが、問題は日本語をあまりにも簡単に習得できる言語であると決め付けてしまうところに落とし穴が隠れているのである。塚本(1990)では「朝鮮語は日本語と最も似ている言語であるのは間違いではないが、従来指摘されてこなかったことで単文における「命題」「モダリティ1」「モダリティ2」²の三カテゴリー間では両言語の類似性に程度の差が認められる」との指摘をした。要するに、日韓両言語の間では「命題」における類似性は

高いが、「モダリティ」における類似性は、「命題」ほど高くはないとのことである。

このような見解は、本稿のテーマでもある一テクル文型からも伺えることで、例えば「だんだん怖くなってきた」のように、一テクルを用いることで表現主体の「怖い」という感情が時間の変化とともに増してきたことを表す文を韓国語に訳すると、「だんだん怖くなった： chomchom museowuhjutta」という「命題」のみの表現となる。換言すれば、一テクルに相当する「a/oe+oda」は、「怖い」「嬉しい」「悲しい」などの表現主体の感情を表す命題とは共起しにくいのだ。また、「お客さんが苦情を言ってきました」のような表現対象（お客さんが）の行為（苦情を言った）が、表現主体に向けられていることを意味する一テクルも、韓国人日本語学習者の母語の影響から「お客さんが苦情を言いました」という「命題」のみの表現になりやすい。実際、韓国人日本語学習者の作文調査³の結果からでも、「怖くなってきた」「苦情を言ってきました」のような一テクルに関しては非用⁴の傾向がみられた。

韓国人日本語学習者にとって実際の使用に問題にならない一テクルの意味は、「a/oe+oda」の基本義ともされる「今日は調子が悪かったので、5時に帰ってきた」「甥が私の部屋に入ってきた」のような、表現主体の視点領域への空間的移動を意味する場合である。

従って、韓国人日本語学習者に「一テクルは「a/oe+oda」である」という日韓両国語の類似性を強調しすぎることは言語処理ベースが韓国語に置かれる環境を作り出してしまうことになり、韓国語と直接対応できない表現から注意を引き離してしまう恐れがある。

3. 一テクルと「a/oe+oda」との比較

日韓両言語における一テクル文型の相違を調べ、韓国人日本語学習者にとって習得困難な一テクル文型とはいかなるものであるかを示す。日本語文型辞典（1998）では一テクルの意味を7つに分類している。

〈一テクルの用法〉⁵

- ①「移動時の様態」：ここまで走ってきた。
- ②「近づく移動」：先月日本に帰ってきました。
- ③「継起」：ちょっと切符を買ってきます。
- ④「継続」：17歳の時からずっとこの店で働いてきた。
- ⑤「出現」：赤ちゃんの歯が生えてきた。
- ⑥「開始」：最近少し太ってきた。
- ⑦「こちらに向かう動作」：化粧品を買った客が苦情を言ってきました。

3.1 「a/oe+oda」と対応できる一テクル

日本語文型辞典（1998）では、①「移動時の様態」②「近づく移動」③「継起」の意味について次のように示している。「移動時の様態」は、どんな動作をしながら来るのか、またはどんな手段でくるのかを表し、「近づく移動」は、離れたところの人やものが、話し手

の領域に近づくことを表す。また、「継起」は、ある行為を行ってから来ることを表すものであると述べている。この三つの意味からは、表現主体の視点が置かれている視点領域への空間的移動の意味が伺えるのだが、これらの意味は韓国語の－テクルに相当する「a/oe+oda」にも同様の意味がみられる。よって、①から③を韓国語に置き換えてみると、いずれも「a/oe+oda」が用いられていることが確認できる。①「移動時の様態」(走ってきた: talryeooda) ②「近づく移動」(帰ってきた: toraoda) ③「継起」(買ってくる: saoda) なお、変化や動作が過去から続いて今にいたることを表す④「継続」(働いてきた: ilhaeoda) の意味も、韓国語の「a/oe+oda」と対応できる。「今まで一生懸命に頑張ってきた」「これまでいろんな経験をしてきた」のように、過去に始まったある動作や状態が発話時まで継続されたことを表す場合は、日韓両言語とも－テクルと「a/oe+oda」を用いて表現する。

3.2 「a/oe+oda」と対応できない－テクル

日本語文型辞典(1998)では、－テクルの「出現」(赤ちゃんの歯が生えてきた)の意味について「今まで存在しなかったり見えなかったりしたものが、現れることを表す」と示し、「開始」(最近少し太ってきた)では「変化が生じることを表す」と述べている。この「赤ちゃんの歯が生える」「最近少し太る」という事態は、表現主体が直接赤ちゃんの歯が生えたかどうかを目で確認することができ、また「最近少し太る」に関しても表現主体の感覚から判断できるものであることから、「学校に漫画を持ってきた」「17年間働いてきた」の－テクルの意味とは区別される。このような表現主体の知覚および感覚から判断できる事態に後続する－テクルは「a/oe+oda」と置き換えられない。そして「こちらに向かう動作」(化粧品を買った客が苦情を言ってきた)のように、表現対象の意図的行為であるとも言うべき事態に後続する－テクルも「a/oe+oda」とは置き換えられない。例えば、「バスで変なおじさんが隣に座ってきた」「相手チームが選手を交代してきた」「田中が夜中3時に電話をしてきた」のような、表現主体にとって表現対象の行為に意図性があると判断できる場合は、事態を事態のまま表現するのではなく、－テクルという話者方向性表現を用いて表現主体と事態との関連性を言語化する必要がある。

そして、⑤「出現」(赤ちゃんの歯が生えてきた) ⑥「開始」(最近少し太ってきた) ⑦「こちらに向かう動作」(化粧品を買った客が苦情を言ってきた)の韓国語の訳には、「a/oe+oda」が用いられず、そのまま「生えた: natta」「太った: chotta」「言った: haetta」のように、日本語の[タ]に対応する[ta]で文を終わらせる。以上のことをまとめて次に表で示す。

表1 <日韓両言語の－テクルの対照>

番号	用法	日本語	韓国語	「oda」使用
1	移動時の様態	走ってきた	「talryooda」	○
2	近づく移動	帰ってきた	「toraoda」	○
3	継起	買ってくる	「saoda」	○
4	継続	働いてきた	「ilhaeoda」	○

5	出現	歯が生えてきた	「iganatta」	×
6	開始	太ってきた	「chotta」	×
7	こちらに向かう動作	言ってきた	「malhetta」	×

韓国語では、「学校へオモチャを持ってくる」「車に乗ってきた」「どこからかボールが飛んできた」のように表現主体の視点領域への空間的移動を意味する場合は「a/oe+oda」が用いられる。そして、「ここで30年間暮らしてきた」「10年間日本語を勉強してきた」のような、過去のある時点から発話時点にいたるまでの時間的継続の意味を表す場合も「a/oe+oda」と対応できる。しかし、韓国語日本語学習者にとって一テクルの「出現」「開始」「こちらに向かう動作」の意味は、学習者の母語である韓国語の「oda」は用いず、「事態」のまま文を終わらせるため、これらの用法に関しては指導の際に注意が必要となる。

なお、「a/oe+oda」にみられる非多義性の原因について述べるために、「a/oe+oda」にない「出現」「開始」「こちらに向かう動作」を一テクルの「心理的方向性」の意味として捉える。心理的方向性とは、一テクルの基本義とされる「空間的移動」の意味がだんだん薄れ、「電車のライトが見えてきた」「胸がわくわくしてきた」「お客さんが文句を言ってきた」のような話者の感情・感覚や思考判断といった認知領域への移動を意味する。

4. 「a/oe+oda」の非多義性について

この節では、一テクルには見られる多義性が、なぜ韓国語の「a/oe+oda」には見られないのかという、一テクルの多義性に対する逆の観点から「a/oe+oda」の非多義性の原因について考察を行う。この問題を次のように、本動詞を「母」に、補助動詞を「子」に喩えて述べることにする。つまり、補助動詞の一テクルと「a/oe+oda」は「子」になり、本動詞の「来る」と「oda」は「母」となる。日本語の場合は母である「来る」が背が高いことから、その子である一テクルちゃんも背が高いという見方からの研究がある。山本(2000)の「本動詞「くる」の多義構造が一テクルにも意味拡張を及ぼし、同じく多義性を持たせる」という見解がこれに相当する。このような観点を踏まえて韓国語を捉えると、子供の「a/oe+oda」ちゃんの背が低い理由は母である「oda」の背が低いからであるという結論に至ることになるのだが、しかし、もう一つの見方「母の「oda」は背が高いのに、子である「a/oe+oda」が背は低い」という可能性も考えられることから、本節では「a/oe+oda」にみられる非多義性の原因についての二つの仮説を立て、本動詞の「oda」とどのような関係性を持つものであるかについて考察を行うことにする。

仮説1：「a/oe+oda」が非多義性なのは、元々本動詞の「oda」の意味が狭いためである。

仮説2：「a/oe+oda」が非多義性なのは、本動詞の「oda」にはみられた多義性が補助動詞化される際に一部縮小してしまったからである。

4.1 「くる」と一テクルに見られる意味拡張について

「来る」の多義性を想像するのはそれほど難しいことではない。まず、思い浮かぶのが

「学校に来る」のような「空間的移動」である。このような意味は具体物が空間を経路して移動するイメージから山本（2000）でも「基本義」と認めている意味である。さらに「行く年来る年」のような「時間的意味」、また「胸にドッキと来た」のような「心理的方向性」にまで「来る」のイメージは多義性をみせる。また、このような多義性の広がりには「空間的方向性」から「時間的方向性」へ、さらには「心理的方向性」⁷ へと拡張されていることがわかる。そして、補助動詞-テクルにも、空間的移動「学校にかばんを持ってきた」、時間的意味「10年という月日が流れてきた」、また心理的方向性「怖くなってきた」のように「来る」と同じ意味拡張を持つことが確認できることから、「来る」と-テクルの間ではメタファーの広がりによる意味の関連性がみられるといえよう。

以下では、意味拡張について体系的な考察を行った山本（2000）の「くる」の多義構造を提示しながら、「来る」と-テクルの意味拡張というのはいかなるものであるかを簡略に示す。「来る」の7つの分類に出てくる括弧の中の用例は、左側が「来る」の用例であり、右側が意味拡張を起こした-テクルの用例である。

(1) 「くる」の多義構造

① 物理的移動

「くる」は対象が他から話し手の視点のある空間へ物理的に移動することを表わす。

（向こうから田中さんが来る。→ 次々と送られてくるお祝い品のお礼状を書く。）

② 期待されている役割を果たす

「くる」には移動するだけでなく、到着点で何らかの役割を果たすことも含む場合がある。（新しいコーチが来る。→ 新入部員が入ってくる）

③ 認知領域への移動

「くる」は移動の到着点を認知領域とすることによって、「が来た」という形式で、対象の認知領域への移動を表わすことがある。

（電車がプラットホームに入るのを見て：あ、来た。→ 電車のライトが見えてきた。）

④ 過去から未来へ

時間を過去から未来へ流れるものと捉え、そこを移動の経路とみなす場合である。

（彼女の病気はここまで来ると、もう助からないだろう。→ 長年ひとりで働いてきた女はどうしてもこうなってしまうようだ。）

⑤ 未来から現在、過去へ

時間を未来から話し手のいる時点に向かって流れてくるものと捉えている。

（春が来る。→ 当番が回ってくる。）

⑥ 対抗性

話し手が他者との間のある種の間を「出発点」「到着点」と捉え、他者との間の事態に「くる」を用いることがある。

(将棋の相手に：その手で来たか。→ 嫌みを言ってきた。)

⑦ 因果性

「くる」は何らかの原因によって生じた結果について述べる場合にも用いられる。原因を生む側を出発点、結果の生じる側を到着点とし、事態を比喩的に「移動」と捉えている。

(ストレスから胃痛が来る。→ もしボーナスが出ないとなれば予算が変わってきます。)

このような山本の捉え方は「くる」の多義構造の延長上に一テクルの存在を認めるとの見解であり、換言すれば一テクルに物理的方向から心理的方向にまでの広い意味が存在する理由を本動詞の「くる」に起因するものとして見ている。また、ここで見逃してはいけないことは、日本語の場合は本動詞の「くる」に存在する7つの意味すべてが一テクルへと意味拡張を起している点である。

(2) 「oda」の「心理的方向性」の有無

「a/oe+oda」には「モノの移動」と「時間的継続」の意味しか存在しなかったのだが、はたして本動詞の「oda」にもこの二つの用法しか存在しないのか、もしくは「心理的方向性」とも言うべき比喩的意味が存在しているのか一本節ではこれらの疑問を考察し、「oda」と「a/oe+oda」にみられる意味拡張の実態を探ることとする。なお、「モノの移動」と「時間的継続」については「oda」から「a/oe+oda」に意味拡張されたものとして認め、ここでは、日韓対照から明らかになった「a/oe+oda」の非多義性の一因である「出現」「開始」「こちらに向かう動作」に焦点を絞り考察を行う。従って、山本(2000)の「くる」の多義構造の中から「心理的方向性」と判断される「認知領域への移動」「対抗性」「因果性」を対象に、「oda」との比較を通じて「心理的方向性」の存在有無を調べ、前述の仮説を検証する。検証にあたっては山本(2000)の「認知領域への移動」「対抗性」「因果性」を援用する。

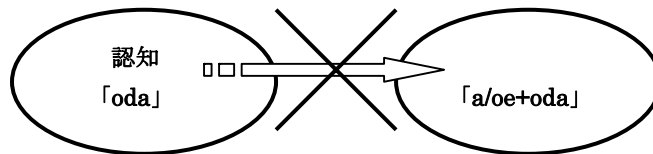
① 「認知領域への移動」

「oda」に「心理的方向性」の意味があるのかを検証するための方法として、山本(2000)の「くる」のメタファーによる派生としての「認知領域への移動」という項目を引用する。山本(2000)では「認知領域への移動」について、「来る」は移動の到着点を認知領域とすることによって、「(が)きた」という形式で対象の認知領域への移動を表す。例えば、「(電車がプラットホームに入るのを見て)あ、きた」では、実際の話し手の眼前に移動が完了したこととは無関係に、対象が視野に入った時点で用いることが可能となる。また、「待ち望んでいる電話が鳴るのを見るやいなや、きた!と叫ぶ」のように、電話が鳴り始めた時点、極端な場合では、電話がなる気配を感じた時点で用いることも可能であると述べた。要するに、「認知領域への移動」となる対象は、電車のような視覚で感知できるものから、電話のベルのように知覚で感知されるものまでが存在する。そして、このような「認知領域への移動」は、「文法化」した一テクルにも「来る」と同様存在する。例えば、「電車のライトが見えてきた」「胸が熱くなってきた」「怖くなってきた」は、いずれも、「電車のライトが見える」「胸が熱くなる」「怖くなる」という感覚が話し手に知覚された時点で

用いることが可能であることから「認知領域への移動」の「くる」を表わす文型であるという考えである。

一方、韓国語では「電車がプラットフォームに入る」のを見かけたときは、「あ、くる」または「あ、きた」という表現が可能である。また、待ち望んでいた電話が鳴り始めた時点でも「あ、きた」は用いられる。寺村（1984）は「た」の機能の一つとして「過去の期待の実現を表す」ことを指摘したが、韓国語の場合はその機能が「る形」でも「た形」でも表すことができるということになる。しかし、この節では電車がプラットフォームに入るという場面で用いられる「oda」が焦点であるため、「る形」と「た形」のテンスに関する言及はしないが、この二つの場面で「oda」が用いられることから、「oda」の「認知領域への移動」への意味は存在することが確認できる。しかし、「oda」が補助動詞化される、「a/oe+oda」には「認知領域へ移動」の意味が存在しない。「電車のライトが見えてきた」「胸が熱くなってきた」「怖くなってきた」のような用例が韓国語に訳される際は、いずれも「電車のライトが見える」「胸が熱くなった」「怖くなった」のように「a/oe+oda」を用いない表現になってしまう。従って、本動詞の「oda」には存在する「認知的領域への移動」が補助動詞化されると「a/oe+oda」という形式は文末からその姿を消し、使用にいたらなくなるといえよう。

〈図1〉に、「認知領域への移動」に対する「oda」と「a/oe+oda」の関係をイメージ化して示す。左側にある円は、本動詞の「oda」の中には「認知領域への移動」としての意味が存在することを表し、右側の円は補助動詞の「a/oe+oda」のことを意味する。そして二つの円を結ぶ矢印の関係から本動詞から補助動詞へと意味拡張が起こらなかったことがわかる。



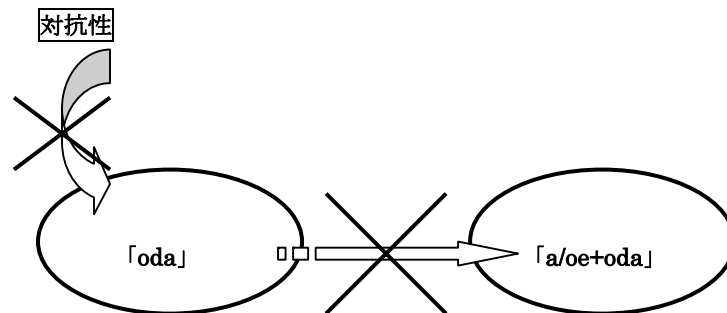
〈図1〉

② 「対抗性」

山本（2000）では、「(将棋の相手に) その手できたか」のような文は、将棋の対戦相手による「(将棋の) 手」が話し手に向かって移動すると捉えている。ここでの「対抗性」とは話し手または話し手の視点のある側と利害関係が一致しないなどの理由から、話し手が対抗する関係にあるとみなしている関係である。そして、この「対抗性」による一テクルも同様に話し手がある種の事態との間に対抗関係があるとみなし、その事態に一テクルを用いる場合があるという見方を示した。次のような用例がある。「(野球で) 相手チームは初回からがんがん打ってきた。」「彼が急にべたべたしてきた。」

ところが、「oda」の場合は「対抗性」の意味は存在しない。なぜなら、韓国語における「対抗性」は「naota=出る」か「hata=する」が担っているからである。従って「その手できたか」は韓国語の直訳で「そんなふうに出たか」もしくは「そんなふうにしたか」になるのである。〈図2〉で、このような見解をイメージ化する。左側の本動詞の「oda」

には元々「対抗性」の意味が存在しない。従って、右側の補助動詞のところへも当然ながら意味拡張は起こらないのである。

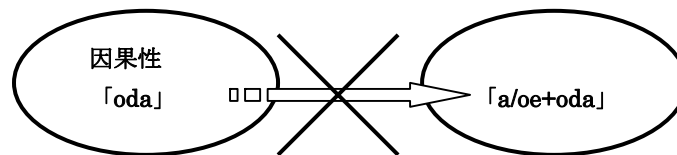


〈図 2〉

③ 「因果性」

山本（2000）では、「ストレスから胃痛がくる」は、何らかの原因によって生じた結果について述べる場合に「くる」を用い、原因を生む側を出発点、結果の生じる側を到着点とし、事態を比喩的に「移動」と捉えている。そしてテクルも同様に因果関係による「出現」を表わす場合があると指摘した。（もしボーナスが出ないとなれば予算が変わってきます。）

「oda」の場合は「ストレスから胃痛がくる」「疲れが腰にくる」の韓国語の訳が「sutoresu eso itoni oda」、「pigonni horiro oda」になることから、「くる」と同じく本動詞の「oda」には「因果性」が認められる。しかし、「因課性」が補助動詞化されると「a/oe+oda」は用いられなくなる。例えば、「予算が変わってきます」は「予算が変わります」に、「嫌みを言われたせいか、猛烈に怒りが湧いてくる」は「怒りが湧く」になってしまい、「oda」が用いられなくなるのが確認できる。〈図 3〉で、左側の本動詞「oda」には存在していた「因果性」の意味が補助動詞へと意味拡張が起こらなかったことを示す。

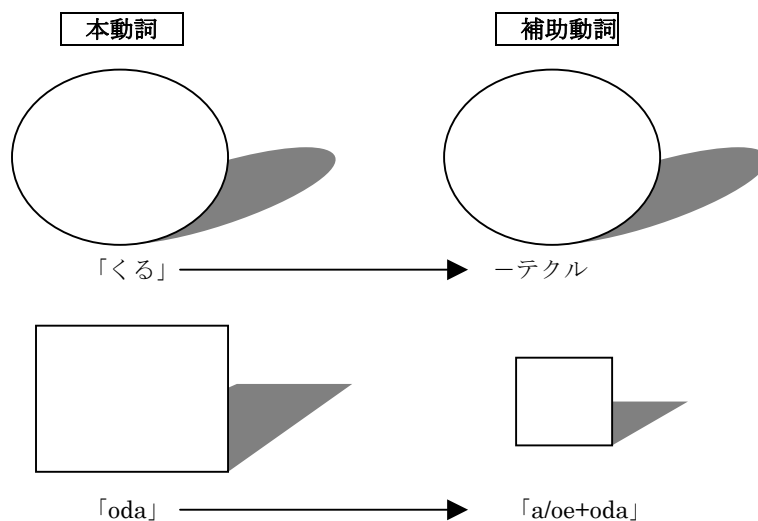


〈図 3〉

(3) 仮説検証の結果

以上の仮説検証を通じて、「a/oe+oda」には存在していなかった「心理的方向性」の意味が本動詞の「oda」には、「対抗性」を除いての「認知領域への移動」や「因果性」においては存在していたことが確認できた。つまり、「a/oe+oda」に「心理的方向性」が存在しない理由は、本動詞「oda」がそのような意味を持っていないからではなく、補助動詞化される過程の中で意味が縮小されたという見方が妥当だと判断される。

以上の結果を踏まえ、「くる」とーテクルの間に見られる意味拡張と「oda」「a/oe+oda」の間に見られる意味拡張とは、それぞれ異なる様相を見せていることをイメージ化して示す。〈図4〉「本動詞と補助動詞の間にみられる意味拡張」のイメージで日本語の「くる」ーテクルのイメージは「○」で示し、韓国語の「oda」「a/oe+oda」のイメージは「□」で示す。また、二つを結ぶ矢印は意味拡張が起こる方向を表すものである。「○」の場合は両方とも大きさに変わらないのに対し、「□」の場合は補助動詞化されると大きさが縮小してしまう。



〈図4〉

5. まとめと今後の課題

本稿では、韓国語日本語学習者にとって母語の影響からその習得が難しいと予想されるーテクルの「意味」を提示し、「意味」習得の困難さを両言語の本動詞から補助動詞への意味拡張の相違から示した。ーテクルは、「空間的移動」から「時間的継続の意味」「認知的意味」「対抗性」「因果性」へと意味拡張を見せる反面、「a/oe+oda」の場合は多義性を持つ本動詞は存在するものの、補助動詞「a/oe+oda」へと意味拡張が起こらなかったことに非多義性の原因があった。

なお、「a/oe+oda」と対応できなかったーテクルについて、話者の感情・感覚及び思考判断という「心理的方向性」への移動であるという見解を示したが、本論ではその見解に対する具体的検証や妥当性についてまでは及ばなかった。今後は、このような見解への検証を含め、ーテクル文型の本質的意味を日本語学習者に分かりやすく伝えるための提案を行いたい。

注

- 1 「a/oe+oda」の「非多義性」とは、「単義」の意味を指すのではなく一テクルにみられる「多義性」と比較した結果、一テクルの意味ほど多義ではないことを意味する。
- 2 塚本（1990）「日朝対照研究と日本語教育」『日本語教育』72号
- 3 姜（2005）
- 4 水谷（1993）は、「学習していながら使用にいたらない表現を「誤用」に対して、「非用」と名付け観察・分析の対象とすることによって学習者にとっての学習難点と、日本語の特徴を明らかにすることができる」と述べている。
- 5 『日本語文型辞典』（1998）一テクルの用法
- 6 山本（2000）では「くる」の意味分析を行い、基本義と派生義を認定し、さらに各々の派生義が生じる仕組みについて考察した。次に一テクルの意味を分析し、「くる」の持つ各意味が文法化したものが、一テクルに見られる意味であり、「くる」と一テクルの多義構造が重なるものであることを示した。
- 7 「心理的方向性」とは「富士山が見えてきた」「お客さんが文句を言ってきた」「胸がドキドキしてきた」のような話者の感情・感覚及び思考判断といった認知領域への移動を意味する。

参考文献

- 川口義一（1996）「日本語指導の文脈化『日本語教育・異文化コミュニケーション』北海道国際交流センター
- 姜 美善（2005）「テクル」文型からみる表現者と事態との関係—新しい視点論「Z理論」の提案—早稲田大学大学院日本語教育研究科修士論文
- 塚本秀樹（1990）「日朝対照研究と日本語教育」『日本語教育』72号 日本語教育学会
- 富田隆行（1997）「「～てくる」と「～ていく」」『続・基礎表現50とその考え方』凡人社
- 益岡隆志（1992）「表現の主観性と視点」『日本語学』8-11 明治書院
- 水谷信子（1985）『日英比較 話しことばの文法』くろしお出版
- 水谷信子（1993）「非用と談話の展開」『日本語学』12-9 明治書院
- 山本裕子（2000）「「くる」の多義構造「くる」一テクルの意味のつながり—「くる」一テクル移動比喩による派生、迎える立場」『日本語教育』105号 日本語教育学会
- 山本裕子（2001）「行為の受け手であることを表す一テクルについて」『言葉と文化』名古屋大学大学院
- 山本裕子（2001）「聞き手とベースを共有することを表す一テクル「～ていく」について」『日本語教育』110号 日本語教育学会
- 山梨正明（1993）「認知言語学—ことばと心のプロセス」『日本語要説』ひつじ書房